

making ICHIKA

どるふ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

実は女の子だった一夏がオリ主に食われるために頑張らされるお話

※本作は拙作「オリシユ〜」の155話くらい（現在146話）で分岐するIFストーリーです

たぶん続きません

目次

一夏死す

1

悪夢

13

一夏死す

タッグマッチトーナメントから半月ほど経過した。

豪華（？）景品が提供され、白熱したんだかしなかつたのだからわからないが、兎も角 I S 学園が誇るビッグイベントの一つである。

大きな問題もなく無事に終わり、と言う事は、1年生はもうじき修学旅行である。

修学旅行までまだ間があるとは言え、生徒たちの誰もが楽しみにしているイベントに違いはないであろうが、どういうわけか1年1組の教室は沈んだ空気に包まれていた。

原因は間違いなくリーシュである。

リーシュ||オリオールそろそろ18歳。二人目の男性 I S 適合者として I S 学園に入学し、ビーナスの愛し子と讃えられるほどの美貌と共に本人の気さくな人柄が好まれて、いつだつてクラスの中心でいた。

リーシュがいると否応なくその場の空気を支配してしまうのだ。

そのリーシュが、実に珍しく沈鬱な表情で俯いている。

機嫌が悪い時は今までも何度かあった。

しかし切り替えが早い男であり、誰かに声を掛けられればほとんどその瞬間につまら

ない事は忘れて柔らかな笑みを見せる。

それなのに今日は、生徒たちから挨拶をされても「……………ああ」と生返事を返すばかり。

挙句、席に着いたら机に両肘をつけて顔を覆ってしまふ。

誰もがリーシユの様子を気に掛けて心配そうな視線を送っているのだが、今日のリーシユはそれをわかつていながら応えられない。

何か余程のことが起こったらしい。

実を言えば予兆はあった。

数日前から、もう一人の男性 I S 適合者である織斑一夏が欠席しているのだ。

その日以来、生徒の誰もが一夏の姿を見ていない。

リーシユの尋常でない様子からして、一夏の身に何かが起こったのは間違いないと思われた。

その傍証として、一夏の実の姉であるマドカの様子が険しい。

二期期になって転入してきたばかりの頃は鋭い表情を見せたが、今はもう学園に馴染んだのか、最近では稀になっている。そのマドカが転入直後よりも険しい顔をして、マドカと仲が良いはずの本音ですら声を掛けられない。

ちなみに一夏とマドカのどちらが年長か論争が二人の間で密かに交わされ、「私が上

に決まってる」とのマドカの主張により、マドカが姉で一夏が弟と言うことになってしまった。マドカの義理の兄であるリーシユは、マドカの方が妹なのではと思わなくもなかったが、マドカの本当の生年月日が曖昧と言う事で好きにさせていた。

一夏とルームメイトである篠ノ之箒なら何かを知っているに違いないと視線を向ければ、リーシユやマドカのように不穏な空気ではないが、あからさまに戸惑いと困惑の表情を浮かべている。

何があつたか知っているからこそ、どうしていいかわからないらしい。

リーシユとマドカに近いクロエ・クロニクルは、事情を知っているのか否か、今日も平常運転である。

いつものように大きなサングラスで目を隠し、大人しく席に座っている。

実妹であるラウラから「姉は何か知っているのか？」と尋ねられても、直にわかりますといつれない答え。

落ち着かない朝の空気がどれだけ流れたのか。

教室の扉が開かれて、担任の織斑先生と副担任の山田先生が入室した。

二人の表情も緊張しきっている。

これはいよいよ本当に何かがあつたのだと、生徒たちは悟らざるを得なかった。

自然、背筋が伸びて前を向き、判決を待つ被告の如く、先生の言葉を待ち構えた。

「織斑先生。ここは私からお話します」

「……頼む」

織斑先生は扉の前に控え、山田先生が教壇に立った。

本来ならクラス代表であるセシリアが号令を掛け、先生に向かって起立・礼となるわけだが、今日はセシリアも先生もその事を忘れているのか、教室の空気は凍りついている。

山田先生は厳しい表情で何度か口を開閉し、ついと話し始めた。

「今日は皆さんに大切なお話があります。気付いている人もいるかも知れませんが、織斑一夏君のことです」

やはり一夏のことでは何かがあったらしい。

しかも、大切な話、である。

「数日前から織斑君がお休みしているのは病欠と言う事でしたが、本当は違います。織斑先生やオリオール君と相談した結果、皆さんにお話するのはショックが大きいと思われるので隠していました。申し訳ありませんでした」

ぺこりと頭を下げる。

しかし、誰もそれを気に掛けられないでいた。

一夏が病欠と言う事で、本音を筆頭にお見舞いに行こうとした生徒は多かつたのだが、安静にさせたいと言う事で全員が断られていた。しかし病欠が嘘であるならば、見舞いを断つたのは事情を隠したかったからに他ならない。

「織斑君が欠席する前の日の夜のことです。……………落ち着いて聞いてください。……………織斑君は交通事故にありました」

空気が氷結して時間が止まったような、気体である空気が粘度の高い重い液体に変わったような、視界全てが白と黒だけになってしまったような。

緊迫していた教室の空気が、悲痛なものに変わった。

事故の結果、数日間休まなければならなかった。

その数日後、先生から大切なこととして話されている。

落ち着いて聞かなければならない。

導かれる答えは非常に限られてくる。

「トラックに跳ねられそうだった女性を突き飛ばして、代わりに織斑君が……………」
続けられないのか、山田先生が言葉に詰まった。

続けなくても、続きは一つに絞られてしまう。

沈痛な空気はいやまして、生徒たちは皆、リーシュが項垂れていた理由を悟ってしまつた。

リーシュと一夏はたった二人の男性IS適合者で、少しだけ年が離れているけどもとても仲が良さそうだった。

つまらないことで喧嘩するのは、1年1組の生徒なら全員が目になっている。

二人で何となく駄弁っている様子もよく見られた。

箒の話によると、二人で遊ぶことも多いらしい。

その結果、一部女子生徒が「オリオリオリ………」と不思議な呪文を唱えるのは余談である。

けども、その一夏の身に不幸が起こってしまったのだとしたら。

「こんなことを皆さんに報告するのはとても……とても心苦しいんですが……、一夏君は……皆さんと一緒に勉強することが出来なくなってしまうました」

山田先生は顔を伏せて言葉を切った。

一夏の身に何が起こったのか、わからない生徒はいなかった。

「おりむー………死んじやったの?」

本音が呆けたように呟いた。

何を口にしたのか自覚がないらしい。

どんな顔をしているかも自覚がないらしい。

表情が抜けきって、机に涙を落としていた。

泣いている本音を気に掛けてやれる生徒はいなかった。

山田先生の報告は衝撃が大き過ぎた。

「もう少しお話させてください。織斑君が突き飛ばした女性は奇跡的に無傷で助かりました。ですが突き飛ばされた際に頭部を強打してしまって……。正確には織斑君の頭と強くぶつかってしまつたようで、今日まで昏睡状態でいました」

一夏の死は無駄ではなかつた。

そうと聞かされても、会つたことも見たことも聞いたこともない女性の命と、ついこの前まで一緒に机を並べていた一夏の命とでは釣り合いようがない。

それでも、誰かを救うために我が身をなげうつのは、何だかとても一夏らしいように思えた。

しかし、それが何の慰めになろうか。

助かったことを喜ばなければならぬのか。

一夏は帰つてこないと言うのに。

「落ち着いて聞いてください……。その女性は織斑君と頭を激しくぶつけてしまつた影響なのかどうか、目覚めはしたんですが記憶がとて混濁しているようで……。はつきり言つてしまうと織斑君の記憶が移つてしまつたようなのです」

話がとてもおかしな方向へ急展開した。

しゃくり上げて泣いていた本音も思わず泣き止み、鼻をすすって目元を制服の袖で拭き、赤い目で山田先生を見た。

真剣な顔をして、冗談を言っている様子はない。

「織斑先生とオリオール君が問答してみたところ、その女性は織斑君の記憶のほとんど全てを持っていることがわかりました。彼女は身分証を持っていなくて、織斑君の記憶が混じってしまったせいなのかわかりませんが自分自身の記憶が全く思い出せなくなってしまったそうです。残念なことに、身元に繋がる所持品はありませんでした。彼女がどこの誰なのか調べる手段がないそうです」

更におかしな方向へ先鋭化していく。

「彼女のことは何もわからないんですが、外見から推測して織斑君と同じ15歳ではないかと言うことになりました。不幸中の幸いって言うのかどうかわからないんですけど、ISの適性も持っているようです。試してみたところ、織斑君が持っていた専用機との相性がとてもいいようです」

泣いている場合ではなかった。

一番泣いていた本音とて、話の展開について行けずぽかんと口を開いている。

「彼女の身元が判明するまでと言う期間限定ですが、それまではIS学園に在籍してもらうことになりました」

「急な話で混乱するのもわかる。だが1組の担任としてではなく、一夏の姉として頼む。いつまでになるかわからないが、彼女を一夏の代わりとして受け入れてやって欲しい。

……………入れ」

「失礼します」

入って来た。

ざわ・・・

ざわ・・・

彼女や女性と言っていたのだから、入ってきたのは女性だった。

山田先生が言うところによると、正しいかどうかはわからないが15歳ということになっっているらしい。

15歳の女の子が入って来た。

彼女は、織斑千冬やマドカ・オリオールにとてもよく似ていた。と言う事は、一夏ともそっくりであると云う事である。

緊張しきった表情ながらも二人の姉よりも幾分柔らかな顔立ちで、そこがますます一夏に似ている。

髪型はシャギーのショートカットで、一夏の髪が少し長くなればそうなると思われるた。

入学するというのだから当然 I S 学園の制服を着ているのだが、リーシュや一夏と同じパンツ姿。ラウラは女生徒でありながら制服はパンツなのでおかしいと言うほどのことではない。

しかし制服を押し上げているとある一部分が生徒たちが知る一夏とはかけ離れている。

何がとは言えないが、箒や本音の向こうを張れるようなサイズである。一夏の実姉であるマドカが憎々し気な視線を向けている。

男子生徒である織斑一夏の面影を知らない者に見せたら、ほうと唸るような少女の姿。

「山田先生から話してもらったと思うんだけど……、この人って言うか、この体の持ち主が事故にあいそうだったのを助けたら、何て言うかオレがこの人になっちゃったみたいで……」。本当のこの人には悪いんだけど記憶はないしどこの誰なのかもわかんないしで……。千冬姉、じゃなくて織斑先生やリーシュと相談して、本当の記憶が戻るかずつとこのままでいるのかって言うのがはつきりするまで、織斑一夏として I S 学園にいることになったんだ。なんかすっごい変な感じなんだけど……。あー……

えーっつと……」

「織斑からすればよく知ってるクラスメイトだろうが、生徒たちはそうじゃない。きちんと挨拶をしろ」

「織斑一夏です。………なんか女の子になっちゃったけどよろしくお願いします！」

静寂。

水を打ったような静寂。

いつまでも続くと思われる静寂は、溜めに溜められたエネルギーが一度に炸裂したような絶叫でかき消された。

「オリム一夏の子になっちゃったの!？」

「一夏が!? 女の子!? なんで!？」

「頭をぶつけて精神が入れ替わる……。まさかそのようなことが……」

「姉はこのことを知っていたのか!？」

騒ぎに騒いでいる生徒たちを、織斑先生は止められなかった。

余りのうるささに隣のクラスの教師が様子見に訪れた。

いつぞやはリーシュが先生の代わりに応対したが、今日は俯いたまま。仕方なしに織斑先生が事情を話し、驚愕は2組にも伝播していく。

1年2組の鈴音が様子見に現れて、

「最近見ないと思ってたらあんたどうしちゃったの!？」

「どうしちゃったって言われても……………」

皆が思い思いに騒ぐ中、リーシュだけはずっと項垂れたままだった。

「そんなわけねえだろクソツタレ……………」

リーシュの眩きは、誰の耳にも入らなかった。

悪夢

東の空が白み始めた。

夏はとうに終わり、夜明けが少しずつ遅くなってきた。と言っても朝早くと言つていい。

クロエが静かに起き出して、同室のラウラとシャルロットには何も告げずに部屋を抜け出し、リーシユの部屋へ朝駆けを始めようとしている。

そんな事とは全く関係なく、一夏は夢の中にいた。

幼い日の夢だ。

先日の学園祭に訪れた幼女よりも小さかった頃のこと。

小学校に上がる前。幼稚園児になっていただろうか。

幼い一夏が青空の下で無邪気に遊んでいたら、突然地面が抜けた。

どこまでも落ちていき、息苦しさを覚えた。

いつの間にか水の中にいる。

息が出来ない。苦しい。水面はずっと上にあつてキラキラと光っている。

水面の向こうには知っている顔があった。

黒髪黒目の少女はマドカではなく、もう一人の姉。

手足をばたつかせてもがき続け、姉の千冬へ手を伸ばそうとするが、千冬は手を伸ばしてくれない。

どうして助けてくれないのか。どうして悲しそうな顔をしているのか。

息苦しさは限界に近付きつつあった。

苦しいだけでなく、暑い。否、熱い。

水はいつの間にかブクブクとあぶくを昇らせて煮立っている。

全身が焼けるように熱く、体を溶かしてしまうのではないかと思われた。

——こんなに苦しいのにどうして千冬姉は助けてくれないの？

舌足らずの声にならない声で、一夏は千冬へ叫び続けた。

千冬は答えてくれない。

悲しそうな顔で一夏を見下ろしている。

一夏の中に絶望が下りてくる。

しかし、諦めるわけにいかない。

諦めてしまえば、このままドロドロに溶かされてしまう。

諦めの悪さは、リーシュから散々教わって来た。

出来る出来ないではなくやるかやらないか。

どんなに分が悪くても、やらずに諦めるなんてサイテーだ。

一夏は足掻き続け、溶け落ちそうな手で熱湯を掻き、崩れそうな足で煮え湯を蹴り、ついと水面に顔を出したと思えた瞬間、強い力で熱湯の中に押し込まれた。

愕然と見上げれば千冬の隣にもう一人の人物があつた。

——東さん……じゃない！ ウサビッチ博士!!

千冬の友人であり、幼馴染の箒の姉でもあり、リーシュがウサビッチと呼んで憚らず憎しみを隠そうとしない女性、篠ノ之束の姿があつた。

束は悪辣な笑みを浮かべて一夏の頭を押さえ付けている。邪悪な笑顔は魔女のようだ。

あちらは少女に過ぎないと言えど、夢の中の一夏は幼稚園に入ったかどうかの幼い姿。力で敵うわけがなかった。

——くそ……、俺はこんなところで………。

叫ぶ力も失われつつあつた。

叫ぶための口も溶けてしまった。

手も足も顔も体も、何もかもが溶けてしまった。

何もかも溶けてしまって、自分は一体何者なんだろう。どうして目が見えるんだろ

う。

唐突に視界が戻った。

目の前にはセーラー服を着た千冬と束が立っている。

千冬は悲しそうな顔をしている。

束はいい笑みを浮かべている。

『今日からいっくんだね！』

——……………それはどういう……………。

一夏の声は声にならず、誰にも届かなかった。

視界が徐々に赤く染まっていく。

視界と共に思考がぼやけていく。

心のどこかの覚めた思考が、ようやく夢が終わることを教えてくれた。

「……………夢……………か……………」

瞼を開けば見慣れた天井が目に映った。

IS学園の学園寮の1025号室。

昨夜眠った時と同じベッドの上に横たわっていた。

ふうと深い息を吐きながら額に手をやると、べったりと冷たく湿った感触があった。思わず手を見ると汗で濡れている。指を擦るとやはりべっとりとしている。ただの汗ではなく、脂汗であるらしい。

「あ~~~~~」

唸りつつ体を起こすと異様に重い。

何も考えず、頭を振った。

酷い夢を見た、らしい。

内容はもう思い出せない。

酷い夢だったことだけは覚えていて、だからこんなに汗をかいてしまったのだろう。

寝間着代わりに着ているTシャツどころかシーツまで濡れている。

素肌の上に着ているものだからTシャツが体に張り付いて、白い無地だから透けて見えて。

「……………ん？」

何かおかしいものが透けて見えているように思えた。

いや、自分の体だし、そもそも人の体はそうなっているのだからそこがそうなのではない。それは誰であつても同じはずである。

しかし、おかしいと感じたのはなぜか。

位置が違う気がする。

具体的には、こう、何というか、盛り上がっている。

Tシャツの下に風船でも入れたような膨らみ方で、しかし間違いなく素肌にTシャツが擦れる感触がある。

Tシャツの下には何も入れていない。しかし何かを入れたような膨らみ方をしていく。そして素肌に生地が擦れるのを感じている。

どうということなのかわけがわからなかった。

悪夢を見たことよりも寝起きで頭がはつきりと動かない。何を意味しているのかわからない。

確かめるべきか、確かめていいのだろうか。

働かない頭は思い通りに体を動かせず、どうすれば確かめられるのかもわからない。

Tシャツをめくればいいと気付くのにどれだけかかった事か。

Tシャツの裾を掴み、そこで少しだけ理性が戻って来た。

「あれ？」

毎日見ている自分の手だ。

自分の顔よりもよく見えている自分の手だ。

僅かな変化でも気付く。

手首が細くなっているような気がした。

目の前で何度か手を開閉する。

思い通りに動く。間違いなく自分の手である。それなのにどうして自分の手ではないように思ったのか。

Tシャツをめくつていいのか。

どうしてそんな事を確認しなければならないのか。

そもそも一体何が入っているんだ！

一夏は、ようやく目を覚ました。

何がおかしいのかにも気づいた。

どうして体を重く感じたのかも気付きつつあったが、気のせいだと思いたかった。

おかしいことになっているが、目の前にある現実は否定できない。

理性を取り戻したのが災いして、一夏は困惑の極致に陥った。

何が起こっているのかわからない。

自分の体に何かが起こったのはわかるが、どうして起こったのかわからない。

どうして自分が。いやもしかしたら気のせいなのかも。

思考は行きつ戻りつ。

何度も逡巡し、否応なく膨らんだTシャツと細い手首が目に入り、一夏は決断した。

確認しないではいられないのだ。

Tシャツに掛けた手を一思いに持ち上げて、

「起きたか？ 随分うなされていた様だが悪い夢でも見たのか？ ………………」

!？」

「ほ、箒？」

「誰だ貴様！ 一夏はどこに行った何処へやった!？」

「いや待てオレだよオレ！」

「オレ!? オレオレ詐欺というやつだな！ 私を詐欺にかけようとは後悔させてやろう

!!」

「待て待て落ち着け！」

箒は見た。

一夏のベッドの上で、一夏ではない人物が、Tシャツをたくし上げている姿を。

一夏ではないと断言した理由はとてもシンプルである。

たくし上げられたTシャツから覗かせたものは、一夏は持っていないはずのもの。

豊かな乳房があったのだから。